

反復性中耳炎に漢方薬「十全大補湯」が有効！？

乳幼児は風邪を引き易く、そして急性中耳炎になり、その後何度も何度も中耳炎を繰り返す「反復性中耳炎」になる患児が少なくありません。「反復性中耳炎」の定義は、「6か月間に3回以上、あるいは12か月間に4回以上」の急性中耳炎になった場合です。

「小児急性中耳炎診療ガイドライン2009年版」によると、反復性中耳炎は、急性中耳炎児の10～15%程度であり、鼓膜チューピングは著効するが、その後鼓膜穿孔（鼓膜に穴が残る）を2%程度に起こすということでした。

そのガイドラインに漢方薬「十全大補湯」（じゅうぜんたいほうとう）による治療が記載されています。元々「十全大補湯」は、大病後や手術後の全身衰弱に対する漢方薬です。元気がない、気力がなく、食欲不振などの「気虚」、顔色が悪い、皮膚につやがない、目がかすむなどの「血虚」の人が対象です。

従って、元気で活発な小児にこれを処方することは、私には意外でした。

ほとんどの耳鼻科では中耳炎の治療として抗生剤を処方しますが、乳幼児では反応が良くありません。すぐぶり返すために何種類かの抗生剤を何度も投与されているのが現状です。そのため抗生剤が効かない耐性菌が発生してしまうし、抗生剤により腸内細菌の乱れが起こり、免疫力が低下する要因となっています。

また細菌に対する免疫機構でIgG抗体

（免疫グロブリンG）がありますが、母親由来（経胎盤）のIgG抗体は生後次第に減少し、月齢3～8か月に最低値になります。そして自己生産のIgG抗体は2～4歳までに緩やかに上昇してきます。従って、3歳頃までは色々な感染症にかかる状態が続くのです。

感染症は、「生体側の免疫力」と「微生物（細菌やウイルス）の繁殖力」のバランスで成立します。「十全大補湯」は、食細胞の貪食活性化、サイトカイン産生の調整、NK細胞活性の増強など免疫力をアップさせる作用があります。黒部市民病院耳鼻科の丸山裕美子先生の報告では、「十全大補湯」の投与により、急性中耳炎の罹患回数、発熱日数、抗生剤投与日数、通院回数の改善を認めています。

漢方薬にも期待しますが、もっと大事なことがあります。家族の禁煙です。家庭外での喫煙も止めることです。また集団保育から家庭保育に近い少人数保育が望まれます。予防接種（特にヒブ、肺炎球菌、インフルエンザ）もしっかり受けましょう。また「はなかみ」は大事な予防策です。うまくすると1歳ころからできるようになると言われていますので工夫しましょう。

免疫力が低下している乳幼児をいかにして抵抗力をつけるか、特に我々小児科医に課せられた命題ですが、漢方薬はその一端を担っています。問題は、子どもがそれを飲んでくれるかです。それは最終的に親の熱心さ、執念によると思います。（たまなは）